



# 小麦「きぬあかり」における赤さび病被害低減技術を開発

— 小麦の収量安定に貢献します —

## 開発の背景・ニーズ

愛知県が開発した小麦「きぬあかり」は、その多収性により農家の所得向上に貢献していますが、2015年、2016年産は赤さび病が多発し、収量が減少しました。そこで、収量を安定させるため、赤さび病被害を低減するための技術開発に取り組みました。

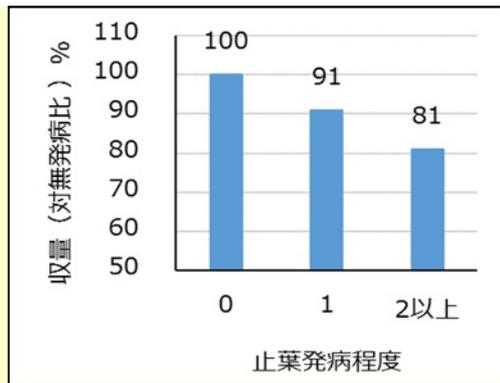
## 成果の内容

- ・ 乳熟期（出穂25日後頃）の止葉の発病程度が大きいほど減収割合が大きくなるため、止葉での赤さび病の発生を減少させることが重要でした。
- ・ 赤さび病の防除は、莖立10日後または止葉抽出期（出穂10日前頃）に1回、開花期に1回実施する防除体系が有効でした。
- ・ 赤さび病は2月と3月の感染好適日（1mm以上の降雨かつ日平均気温12°C以上の日）が4日以上あると多発する危険性が高くなりました。1km<sup>2</sup>メッシュ気象データを利用し、リアルタイムで赤さび病の多発危険度を確認できるICTツールを作成しました。



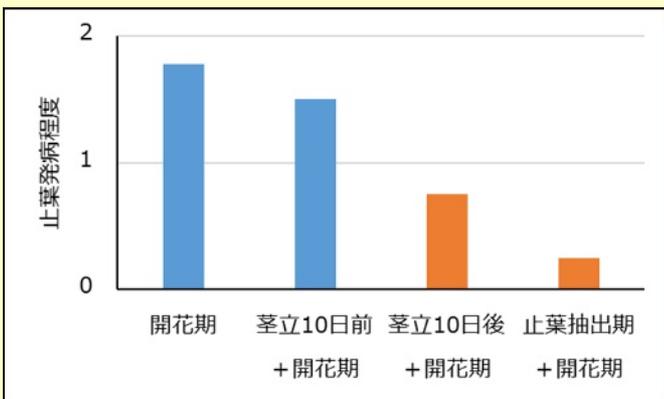
赤さび病の病斑（左）と病気が進行して止葉が枯れた「きぬあかり」（右）

※止葉とは最も上位にある葉で、小麦の登熟には不可欠な葉。



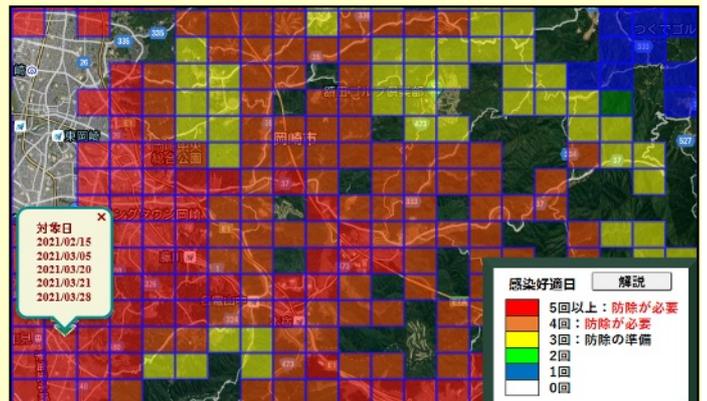
止葉発病程度と収量

※止葉発病程度は赤さび病の病斑数を調査。発病程度 病斑数0個：0、1～5個：1、6～10個：2



防除時期および回数と止葉発病程度

※莖立10日前、莖立10日後、止葉抽出期はアゾキシストロピン水和剤、開花期はメトコナゾール水和剤を散布。



赤さび病の多発危険度予測

※四角は1km<sup>2</sup>メッシュを示す。赤くなるほど多発する危険性が高いことを示す。

## 愛知県農業への貢献

防除時期や多発危険度予測は栽培管理支援ICTツール（AgriLook愛知県版）で確認することができ、赤さび病被害の低減に貢献しています。

作物研究部  
環境基盤研究部